

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370588

研究課題名(和文) 日本植民地におけるメディアを利用した日本語教育に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental study on Japanese language education using media in Japanese colonies

研究代表者

上田 崇仁 (UEDA, Takahito)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90326421

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：東アジア各地でのメディアを利用した戦前の日本語教育について、資料収集を基盤にした基礎的研究を進める予定だったが、希望通りの調査ができず、資料の収集も進められなかった。そのため、地域を朝鮮半島に絞り、ラジオ講座や新聞掲載の日本語講座のデータ収集に専念した。その結果、従来、皇民化教育や軍国主義といったキーワードで整理されてきた教科書の内容について、学習者や時期、内地と植民地とで従来と異なった分析ができるのではないかと、という問題意識を持つに至った。計量言語学的手法で教科書本文を分析してみるという方法を考え、本科研の成果として収集した教材データを活用し、今後、研究を進めていく端緒となった。

研究成果の概要(英文)：I planned to conduct basic research based on data collection on Japanese education before the war using media in various parts of East Asia, but I was unable to conduct research as desired and could not proceed with the collection of materials. For this reason, I focused on gathering data on Japanese courses on radio courses and newspapers, narrowing down the area to the Korean Peninsula. As a result, the problem consciousness that the contents of textbooks which had been conventionally arranged by keywords such as empowering education and militarism can be analyzed differently from learners, timing, internal colonies and colonies. Considering a method to analyze the textbook text by metrological method, I used the teaching material data gathered as the result of the main research laboratory, and became a beginning to advance research in the future.

研究分野：日本語教育学

キーワード：植民地 ラジオ講座 新聞記事 メディア 国語教育 日本語教育

1. 研究開始当初の背景

これまで植民地朝鮮における日本語教育に関する研究を初等教育機関で使用された教科書、ラジオで放送された「国語講座」のテキスト収集、朝鮮半島で発行された新聞「毎日新報」掲載の「国語講座」、いわゆる国策紙芝居の中で取り扱われた「国語」に関する啓蒙思想、という4点から調査を進めてきた。調査研究の中で、上記のすべてが、特にラジオ講座が顕著ではあるが、国境や地域の境界を越えた広がりを持つものであること、また、地域の差が大きいのではないかということに関心を持つようになった。実際に、本科研費受領前に整理し始めたラジオ講座のテキスト類型化の過程では、朝鮮、満州、天津、シンガポール、南洋諸島、北米、インドネシアでそれぞれ放送されたラジオ「国語（日本語）」講座の内容がシラパス的にも大きく異なることを示すことができた。また、他の研究者による教科書の研究からも地域差があるということがわかっていった。

2. 研究の目的

今回の研究である「日本植民地におけるメディアを利用した日本語教育に関する基礎的研究」では、日本の植民地とした地域におけるメディア、具体的には、ラジオ、新聞、紙芝居を取り上げ、資料収集とその地域の特徴、地域を超えて共通する部分の分析を進めることを目的とした。

3. 研究の方法

資料収集については、韓国、中国、台湾、タイ、インドネシア、シンガポールの図書館及び古書店を調査する計画を立てた。このうち、シンガポール以外は調査協力を依頼できる研究者も確保していた。

また、国立国会図書館、国立こども図書館をはじめとした国内の図書館及び各地の古書店を調査し、資料収集を進めることと最初のステップとした。

次に、収集した資料について、語学教材に関しては、シラパスの種類を検討したのちに、文法シラパス的な視点からは、どういった文法項目から教育をはじめ、どのような順序で構成していたのかを明らかにする。トピックシラパス的な視点からは、どういった話題が選択されていたのかを明らかにする。機能シラパス的な視点からは、どういった言語機能（依頼、謝罪、命令、など）がどの順序で提示されているのかということを明らかにする。場面シラパス的な視点からは、日本語を使用する場としてどのような場所が想定されていたのかを明らかにしようと考えた。

次に、「毎日新報」では、断続的に掲載された「国語講座」の内容と目的を明らかにする。啓蒙活動に使用された「紙芝居」については収集活動を中心にした。

4. 研究成果

(1) 公表に至った研究成果

本科研期間中の調査活動が当初の計画通りに進まず、現地調査が行えたのは、日本国内の国立国会図書館、国立子ども図書館、筑波大学附属図書館、愛知県立図書館、神田古書店街、海外では韓国のソウル及び釜山の古書店にとどまり、十分な成果が上げられなかった。残念ながら、本報告書5のように、公表に至った研究成果はない。

(2) 成果取りまとめ中の研究概要

新聞掲載の「国語」講座の抜粋作業は終わっており、その分析を始めている。現時点では、系統だった講座にはなっていないと考えられる。言い換えれば、複数の講座が立ち上がっては姿を消しており、継続して何かの目標を持っていたとは思えない状況である。

ラジオ講座については、従前の調査で把握していた傾向を裏付け強化する調査結果となっている。つまり、朝鮮半島で放送されたラジオ講座の特徴は、文法シラパスとトピックシラパスの採用に特徴がみられる。テキストの入手が非常に難しく、テキストを丸ごと入手出来ているのは一時期に限定される。それと、新聞に掲載されたテキストの抜粋から検討を進めている。新聞掲載のテキスト抜粋を見ると、文法的にやさしいものから難しいものへという積み上げ型の構成であることが見て取れる。しかしその翌年の放送で使用されたテキストを見ると、国旗、天皇、愛国班などの話題に即した教材の取捨が行われているという特徴がみられる。シンガポールのラジオ講座の特徴は、機能シラパスの採用である。中国の華北、北米向けの講座は、共用としての日本語教育にその特徴があり、今回、新規に収取できた資料はないがより慎重な検討を加えることができた。

国策紙芝居による日本語学習啓蒙の作品としては、「かはいい孫娘」の入手にとどまる。調査の過程で「雑誌『教育紙芝居』」を入手することができ、現在、その記事の分析を進めているところであるが、外地での展開についての記述が思ったほどなく、内地での展開から地域の研究会の記事をたどる作業を進めている。

また、当初、調査対象としていなかった1940年代前後に朝鮮半島で撮影された映画の調査も並行して進めている。いずれも、日本語教育への啓蒙という視点で解釈可能な作品である。例えば、「家なき天使」という作品では、浮浪状態であったこどもが孤児院に収容され生活習慣の改善とともに日本語力が向上するというストーリーであり、「志願兵」という作品では、小学校を卒業した主人公が学歴のある立派な青年として描かれ志願兵を志望するというストーリーになっている。「授業料」という映画においても、日本語が話せない祖母、日本語が話せる友達、日本語が話せる人たちの生活が豊かであることが象徴的に描かれている。

当時の日本語教育に関する研究は、何か一つを取り上げて見ていくことにより、多くの情報が落ちてしまうことが明確にわかる事例である。

こういった形で、資料の新規収集が当初計画通りに進められなかったこともあり、手持ちの資料の検討をより深く行うことができている。まとめ次第、公表する予定である。

(3) 研究より生まれた今後の展開

本研究では、東アジア、東南アジアを対象とした資料収集を予定していたが、時間的な問題から、国内での調査が中心となってしまった。

しかしながら、国内での調査を進めたことから、以下の視点による調査を行う手掛かりを得た。

従来、植民地や占領地で使用されていた日本語教材、「国語」の教科書に対する分析は、上田(2000)での研究までは、使用されていた語彙の分類と分析が中心で、皇民化教育、軍国教育、といったキーワードで整理されることが多かった。

上田(2000)では、そこに内地と植民地との違い、文法シラパス的な視点を導入した文責を進め、植民地や占領地で行われていた「国語」教育が単純なイデオロギー教育という分析で終わるのではなく、日本語教育用の教材として考え抜かれたものであることを示した。その後の植民地における教材研究は、おおむね、この考え方に沿ったものが展開されていると認識している。

一方で、語彙の分析が調査者の主観によるものであることは否めず、その語彙がどのような文脈の中で使用されているのかが全く分からない状況にあったことが指摘でき、それを解決するために、計量言語学的手法を取り入れることを考えた。

KH コーダーというソフトウェアを利用し、国語教育に使用された教材を分析するものである。

日本が朝鮮半島に統監府を置いた時期、つまり、日露戦争後に使用された『普通学校国語読本』巻八(最終学年の後半期に使用する教科書)に使用された語彙について調べると、以下のようなことが見えてくる。

図1からは、教育機関の最終段階で扱われた内容が、東アジアの情勢(左上)、預貯金の制度(右上)、社会的分業(左下)であることが明確にわかる。

図2からは、この教科書に出てくる語彙の中心が「日本」と「清国」であることがわかり、この語とともに、「韓国」、「兵隊」といった語彙が使用されていることが極めて明瞭にわかる。

こういった計量言語学的な分析ツールを戦前の教科書を対象にして用いた研究は、申請者の見た限りではあまり存在しておらず、申請者がこれまで収集を続けてきた朝鮮半島で使用された教科書のすべてを分析するこ

とで、従来見えてこなかった事実が見えてくるのではないかと期待しているものである。

図1

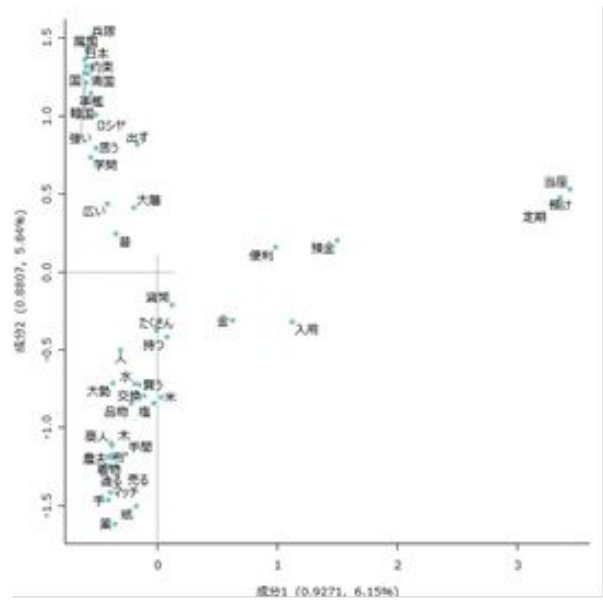
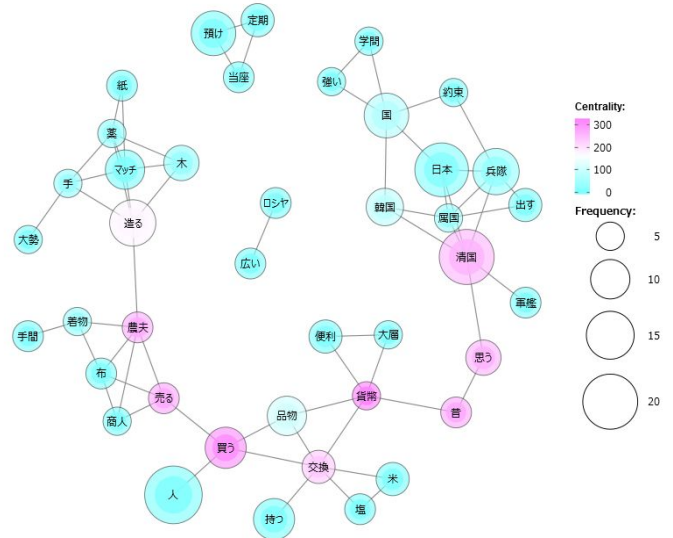


図2



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕

ホームページ等

<http://koyangyi.wixsite.com/uedalabo-ai-kyodai>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上田 崇仁 (UEDA, Takahito)

愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号： 90326421